

序

激動する世界情勢の中にあつては、国家の経営はもとより、個人の生活もまた安閑たることを許されぬ。父が食欲不振をつづけて体力が次第に衰へつつあつた昨年の九月から十月にかけては、私の在職する弘前大学も紛争の最中であつて、到底帰省のできない状況におかれてゐた。電話で病状の悪化を知つたのが十月二十三日の夜で、その夜半には容体急変して危篤状態に陥り、二十四日正午前には事されたのであるから、電話を受けたとき直ちに帰郷の途についたとしても、臨終には間に合はなかつたわけで、まことに不幸なめぐり合せとするほかはない。その最期をみとつた姉の話では、意識のある最後まで（昏睡状態に陥る以前）、私の帰省を待ち望んでゐたといふことで、このことを想起するごとに私の胸は痛んでやまないのである。

理想主義者としての父は多くの夢をもち、知識慾も死に至るまで衰へず、従つて幾つかの著作も計画されてゐたのであるが、結局はどれも未完成に終つた。その中で生前とくに力を入れ、老年の乏しい精力を傾注したのが、この遺稿集の本編にあたる「九鬼家歴代略記」である。この歴代記（著者自身の略称）は、死の五年前、昭和三十九年十月頃に執筆を發意したものであり、本人の希望通り、私としては在世中に一卷の書として公刊することを考へ、その完成をうながしつづけてきたのであるが、自分自身の研究に精一杯だったため、僅かな協力にとどまらざるを得なかつた。

いづれも未完成に終つたとはいへ、父には哲学・歴史その他、ひろく文明批評についての語録・

文章が相当多数あり、中には小冊子として形を成したものであるのもあるので、遺稿集となれば当然それらを網羅収載すべきであるが、公務を帯びて匆忙の状態におかれてゐる今の私には、それは不可能にちかい。しかも、故人の印象がうすれ去らない時期、できれば一年祭までに上梓することが適切であり、望ましくもあるもので、さういふ時間的制約をも考慮して、一先づ「九鬼家歴代略記」を中軸とし、それに関係のある日記々事・書簡・小論文、および代表的史料等を付録として収めることにしたわけである。『中和なかなぎひより一由遺稿集 第一卷』と題したのは、前編所収の一文で知られる通り、故人自撰の呼び名を尊重したからであり、後日、第二卷・第三卷と引つづき上梓する含みをもつものである。

歴史編ともいふべき此の遺稿集第一卷は、一見とっつきにくいやうであるが、著者の文才は読者をひきつける力を十分もってゐるし、内容もまた変化に富んでゐることであるから、お互ひに座右の書として本書に親しんでゆきたいものである。思ふに、著者の念願は我々一族の者が祖先の事蹟を知ることによつて深い歴史的自覚をもつことにあつたので、本書の精読を通じて、処世上多くの知恵を汲み取り、それをお互の生活の場に活かしてゆくことこそ、何にもまして故人の遺志にそふことになるであらう。

本書が成り且つ上梓の運びとなつたのは、多くの人々の協力の賜物である。ここに付記して故人ともども深謝の意を表する。

昭和四十五年九月

みちのく弘前にて

嫡男 宮崎 道生